

多言語社会ブータン王国における市場の言語

一歩み寄りの言語選択 裏通り市場の言語調査を中心に

佐藤 美奈子 (京都大学大学院生)

1 目的

本研究は、19もの言語民族を擁する多言語社会ブータンの市場で展開される商人と客の言語行動と言語認識を明らかにすることを目的とする。ブータンは現在、ゾンカ語(国語)を国民アイデンティティの核とすべく一言語一民族政策を展開する国家と、伝統的な多言語社会で二極化しつつある。本研究は、ゾンカ語、民族語、英語、ヒンディ語という位相の異なる複数の言語が売り手と買い手という立場の相違がある市場のコミュニケーションにおいてどのように用いられているかに着目する。それにより、急速に変化するマクロな社会構造とミクロな個人の言語実践の間で市場というメゾ構造がいかに作用するかを明らかにする。

2. 理論的枠組み

2.1 複言語主義

本研究では、欧州評議会が提唱する複言語主義の複言語能力(Coste, et al. 2009)を第1の理論的枠組みとする。部分能力とその相補的使用(Grosjean 2018; 2008)、生涯を視野に入れた言語習得と変化の過程(「個人史」(Coste, et al. 2009)の概念)に着目することにより複数の言語が機能的に棲み分けるブータンの多言語社会において複数の言語能力をもつ話者がどのように言語を切り替え、その部分能力を相補的に用いているかを明らかにする。

2.2 言語社会化

本研究が依拠する第2の理論、言語社会化論は、「言語を適切に用いるための社会化」と「言語の使用を通じた社会化」の2つから定義される(Ochs, E. & Bambi, S. 2012)。本研究では、民族の全国的な移動が活発化するブータンの首都ティンブーにおける国内移民とホストコミュニティ双方の言語社会化に着目する。全国の民族言語地域から集まった移民がどのように主流社会の言語を身に着け「ティンブー市民」となっていくか、さらに移民を受け入れるホスト側が移民の民族語にどのように対応し、両者の相互作用として現在ティンブーにおいてどのような言語変化が生じているかを明らかにする。さらに移民同士の相互扶助としての言語社会化ストラテジーも取り上げる。

3. 現地調査：第1回調査 2016, 3~4 10days (西部)、第2回調査 2017.3~4 10days (西部~中央部)

3.1 観察調査とインタビュー調査の組合せ

調査は、観察調査とインタビュー調査を組み合わせおこなった。第1に、観察調査により、商人と客の間の会話でどの言語(ゾンカ語、民族語、英語、ヒンディ語)がどれほど、どのように用いられているのか(目的：呼びかけ、商談、雑談)、第1発話からその後の会話の展開における言語の切り替え、商人と客の言語のズレや混在の形(「サンドイッチ型」や「相互乗り入れ型」(泉, 2004: 44))に着目した。第2に、観察したやり取りの第1発話者とその対話者に対してその場で質問票とインタビューによる調査をおこなった。なぜその言語を選択したのか(理由：自分の都合、相手の都合、共通語だから、その他・無意識)、言語選択と対話者間の言語のズレや混在に対する意識の有無をたずねた。第3に、第1と第2の調査のズレとその理由に着目した。「ある言語を実際に使用すること」(実践)と「使用すると述べること」(報告)あるいは「使用していると考えること」(使用感)のズレ(カルヴェ2000)から、ある社会である言語を使用することや使用する人に対して付加される価値やその価値に対する認識(ブルデュー1957, 1982)を明らかにする。それにより、複数の言語の社会的位相や話者人口が変化しつつあるブータンの「今」における、それぞれの言語の過渡的な位置付けや人びとの認識を明らかにする。

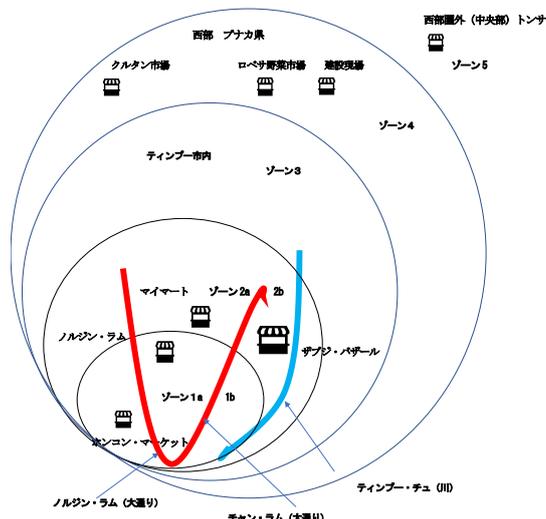


図1 ティンブー市内およびゾーン1～5

表1 市場とゾーンの特徴

		市場名	ゾーン	特徴	
西部・ ゾンカ語圏	ティンブー	ザブジ・バザール (午前)	2b	リバーサイド地区、日曜総合市場。全国各地から売り手・買い手が集まる。午前：週末の買い物をする主婦。午後：建設現場労働者（インド人・国内労働者）	
		ザブジ・バザール (午後)			
		ホンコン・マーケット	1a	裏通り商店街・市場。長期滞在者用イン・移民集住地区、	
		ノルジン・ラム	1b	表通り・オフィスビル、ショッピングモール	
	ブナカ県		マイマート	2	低所得者用集合住宅・移民1世～2世定住地
			ロベサ野菜市場	4	水田地区
		ブナツァンチュ建設現場	4	東西縦貫道路・水力発電所建設現場	
		クルタン市場	4	近隣都市、新興住宅地	
中央部トンサ		トンサ商店街	5	旧街道沿い	

3.2 分析の方法と着眼点

(1) 分析の方法—ゾーン分析と9つの市場

調査は、都市開発が進むティンブーをその都市機能の布置から5つのゾーン、8つの地区にわけ、それぞれの地域に位置する特徴的な9つの市場を対象に、観察調査とインタビュー調査をおこなった。ブータンの首都ティンブーは南北に延びる2本の大通り（ノルジン・ラムとチャン・ラム）と川（ティンブー・チュ）が交差する中心点（時計塔広場）から同心円状に開発が進められている。中心の商業地区（ゾーン1）はノルジン・ラムの表通り（中心業務地区CBD-1a）と裏通り（インナーシティ-1b）にわかれる。ノルジン・ラムの表通りは、近代的なショッピングモールが開発され昼間は若者が賑わうおしゃれな繁華街であるが夜は人気のない商業ビルとなる。裏通りには開発から取り残された狭い路地に古い商店とその上階の長期滞在者用インが並ぶ。かつてはインド人労働者が滞在していたが現在は全国の民族地区から集った国内労働者移民の集住地区となっている。新来移民は、まずこの下町に一時的に身を寄せ、先に到着した先発移民のサポートを受けながら仕事の斡旋と言葉を習得する（「スポンサー付きの移民」（ミルロイ&ウェイ 1992：88））。移民は単独で移住してくるのではない。多くの場合、先発の移民が後続移民である同郷の移民を呼び寄せ、仕事を紹介したり、言葉を助ける等のサポートをしてエスニックネットワークを形成しているのである。その後移民のなかの「成功者」は、ゾーン1の外縁に建設されつつある低賃金労働者の集合住宅（ゾーン2）に移動し、地方から家族を呼び寄せる。そして「ティンブー市民」となり定住化する。学校帰りにノルジン・ラムに集い、英語とゾンカ語を自由に操る若者たちの多くは、これら移民1世を親にもつ移民2世たちである。ゾーン2の外側には文教地区と1戸建ての新興住宅地（ゾーン3）が広がる。労働者移民とは異なる経緯でここティンブーに住むことになった高学歴の「知識人」の居住区である。ゾーン4は西部圏ではあるが近隣のブナカ県となる。国内唯一の空港があるパロとティンブーを結ぶ地の利から近年開発が進み、新興住宅地が建設されている。さらにその向こう、ゾーン5は、民族語圏となる。市場調査は、ノルジン・ラムの表と裏（ゾーン1a, b）、チャン・ラムの表と裏（ゾーン2a, b）、ゾーン4、ゾーン5の各地区、9つの市場でおこなった。

(2) 着眼点—都市開発・移民の移動・言語習得と使用

本研究では、ティンブーの都市開発ゾーンを空間的、時間的に「移動する行為者」として移民を据え、その「移民過程」と「言語社会化の過程」を重ねる。すなわち全国の民族地区出身の民族話者（移民一世）がティンブーの下町の移民地区に集住し、1～3年の間、エスニックネットワークに支えられる形でどのようにゾンカ語を習得し、仕事を得るか、その後3～5年して中堅移民のなかの成功者がいかにして集合住宅に移動して家族をもち、定住化して「ティンブー新市民」となっていくか、さらにその子どもたち（移民二世）がゾンカ語を第一言語とする「ティンブー市民」として育っていくかの過程を、言語習得と使用の実践、さらにそれに対するそれぞれの意識に着目して明らかに

する。さらに、「市場」を「場」とすることで、ホストコミュニティと移民という「古参者—新参者」の関係に、市場独自の論理—「売り手と買い手」の関係—がどのように関わるかにも着目する。

3.3 分析の手順—マクロ構造からメゾ構造1・2

第1に総合市場（ザブジ・バザール午前）の言語調査を中心に、一般的な言語使用とは異なる「市場」独自の典型的なパターンを抽出する。それによりゾンカ語を共通語とするマクロな構造とは別次元のメゾ構造1として「市場の論理」を明らかにする。第2に、全国の9つの市場調査から「市場」の論理に加えて、それぞれの市場独自の地域的特徴としてメゾ構造2が言語使用に与える影響を明らかにする。

4. 調査結果

4.1 9つの市場と6つのテーマ

市場ごとに独自の言語状況が観察された：(1) 総合市場「ザブジ・バザール 午前」では、商人は流れる客の足を止めるために最大公約数的にゾンカ語を用いて客に呼びかける。その後客の言語に切り替えることで心情を掴んだり、自身に有利に商談を運ぶために自身の言語を選択する「戦略的言語切り替え」が観察された。(2) 「ザブジバザール 午後」になると俄然ヒンディ語が目立つようになる。ブータンでは建築労働や下層労働をインド人移民労働者が支えてきた。日曜午前は1週間分の買い出しをするブータン人主婦が主な客であるが、建築現場が休みとなる日曜午後の主な客層はインド人となる。それに応じて市場の言語もヒンディ語へと変わる。「外」の世界では低賃金労働を強いられてきたインド人もここ市場では「客」となり、ヒンディ語を用いて客におもねるのは売り手側となる。それが「市場」の論理である。(3) 開発が進む表通りのショッピングモール「ノルジン・ラム」では移民2世の若者たちが「教育を受けた新世代」のアイデンティティを確かめ合うように英語を用いる「群居機能」（カルヴェ 2001）としての英語が観察された。(4) 新市街のスーパーマーケット「マイマート」では移民から3~5年の主婦たちがゾンカ語使用に徹する。レジの店員も買い手の主婦も共に地方出身者であるがゾンカ語の使用はティンプー新市民としてのアイデンティティであり、自己確認機能としてのゾンカ語使用が観察された。(5) 農村の「ロベサの朝市」では地元の農家の主婦が野菜を売る。彼女らは昼時になると「プナツァンチュ建設現場」のインド人労働者に片言のヒンディ語を交えながら無言で弁当を売り歩く、サイレントトレードをおこなう。農村も近代化の渦中にある。

4.2 ティンプー裏通り「ホンコンマーケット」- 今回の発表

ティンプー裏通りのホンコンマーケットではゾンカ語話者である下町商店街の売り手とその上階のアパートに住む地方移民たちが独自のコミュニケーションを展開する。今回の発表では、特に当マーケットに特徴的に観察された2種類のやり取りを「言語社会化と共生」という観点から分析する。第1は、ホスト社会と移民という関係に売り手と買い手という市場の論理が影響した結果、どちらの言語でもないリングフランカ（広域民族語）が両者の媒介語となった「歩み寄りの言語選択」である。主流言語であり国語であるゾンカ語を第一言語とするホスト社会側の商人も、客に対しては民族語をもって歩み寄る。ただし個々の民族語には対応し得ないことから最大限の努力として選択されたのがブータンの2大民族語—シャーショップカ語とネパール語（共に話者人口20~30%でゾンカ語と並ぶ）—である。民族言語話者である移民側も、未熟なゾンカ語を交えながらそれに応じる。結局、誰の言語でもない第3の言語が互いの媒介語となっている。古参者側と新参者側双方による、共生のための言語社会化の成果といえる。

第2は、エスニックコミュニティ内において移民過程の異なる段階にある、新来移民と中堅移民の間で観察された言語社会化ストラテジー—「代弁」と「促し」—である。ゾンカ語が未熟な新人に代わり、「****とやっている」と「代弁」したり、適切な表現をモデル化（「誘導模倣 (elicited imitation)」や「誘導質問 (leading question)」）、語句の一部を言いかけたり引き継いだり（「空スロット empty slot」）する「促し（プロンプト）」が観察された。中堅移民は、これらの言語社会化ストラテジーを新来移民の言語社会化過程に応じて使い分けることで、新来移民の言語社会化をサポートするのである。本研究ではこれを異郷で共に助け合うエスニックコミュニティ内の「共生のためのストラテジー」であるとともに、中堅移民が、新来移民とホストコミュニティとの関係を構築するために講じた仲介ストラテジーであると捉え、共に共生のための言語社会化と考える。

(1) 言語社会化 1—商人 (ホスト・ゾンカ語話者) 客 (移民・民族語話者) の歩み寄り

表2 商人 (ホスト・ゾンカ語話者) 客 (移民・民族語話者) の歩み寄り

可能言語: ◎第1習得語, ○商取引可能レベル, △限定的, ×不可

誰から		誰に
商人	NO.1 呼びかけ ゾンカ語	商人
40代・女		30代・男
ゾンカ語: ◎	NO.2 応答 ゾンカ語	ゾンカ語: ○~△
民族語:		民族語:
○ (シャーショップ, ネバリ)	NO.3~NO.7 商談 民族語2 (ネバリ)	チョチャガチャカ
英語: ×		(Chocangachaka)
ヒンディ: ×		◎,
	NO.8 ゾンカ語	シャーショップ○
		英語: ×
	NO.9 ゾンカ語	ヒンディ: ×

NO.1 商人: kuzu zanpo (こんにちは).
 NO.2 客: kuzu zanpo (こんにちは).
 la: be da-i. dato tshaā
 (仕事に行ってきたんだ、今、終わった)

商人 客
 * 値段交渉、など

NO.8 商人: la. na-pa pchiru ꞑ-ge
 (へえそうなの、じゃあ、また明日の夜ね).
 NO.9 客: kadrinche (ありがとう)

会話の最初と最後はゾンカ語による定型の挨拶表現となるが、中心となる商談部分は商人 (ホスト側—ゾンカ語話者), 客 (移民—民族語チョチャガチャカ語話者) どちらの言語でもない第3の言語—リングフランカ (ネパール語) が用いられている。商人は、ホスト側であり主流言語派であるが売り手として客となる移民の多くが用いる2大リングフランカ (ネパール語かシャーショップカ語) を習得し、商取引に臨む。移民側も、自身の少数派言語では通じないことは承知しつつ、ゾンカ語も未熟なことから自身の地域のリングフランカであるネパール語で臨む。双方が互いに妥協し、歩み寄ることで会話が成り立っている。

(2) 言語社会化 1—中堅移民による新人移民の「代弁」: 「. . . ze 'lp-de」(. . . っている)

表3 中堅移民による新人移民の「代弁」

可能言語: ◎第1習得語, ○商取引可能レベル, △限定的, ×不可

誰から		誰に
客1	NO.1 客1 呼びかけ ゾンカ語	商人
40代・男		50代・女
ゾンカ語: ○~△	NO.2 応答 ゾンカ語	ゾンカ語: ◎
民族語:		民族語: ○ (ネバリ)
◎ (ブムタンカ)、	NO.3 客1 商談 民族語 (ブムタンカ)	シャーショップ△
英語: ×		英語: ×
ヒンディ: ×	NO.4 客1ブムタンカ+客2ゾンカ語	ヒンディ: ×
客2		
30代・男		
ゾンカ語: ○	ゾンカ語	
民族語:		
◎ (ブムタンカ)		
英語: ×		
ヒンディ語: ×		

NO.1 客1: kuzu zanpo
 (こんにちは).
 NO.2 商人: kuzu zanpo
 (こんにちは).
 chō-lu gaci go-ni
 (何が入用で)
 NO.3 客1: *****
 (あの赤いのが欲しい)
 NO.4 客2: . . . 'ma:p ci go. kho di go-ni le
 (. . . 赤いの、彼は、これが欲しいとのこと)
 NO.5 商人: . . . la. kadrinche
 (そうですか、ありがとうございます)

ゾンカ語の習得途上にある新来移民の能力に応じて言語社会化を助けるためのさまざまな言語社会化ストラテジーが講じられるさまが観察された。ゾンカ語能力が低い移民に対しては「~とっている」と通訳したり、買い物を代行する「代弁」となる。ゾンカ語が少し上達すると「ほら、何て?」(誘導質問), 「. . . って (言いなさい)」(誘導模倣), あるいは新来移民が言いかけた言葉を中堅移民が引き継いで文を完結させる, 逆に中堅移民が出だしを言い, 新人移民に言葉を継がせて文を簡潔させる形「空きスロット」が講じられる。

5. 結論

ホンコンマーケットで観察された2つの特徴的な言語実践—(1) ホスト社会と移民の間で交わされる誰の言語でもない媒介語としてのリングフランカの使用と(2) 段階の異なる移民間で講じられる「代弁」と「促し」—は、前者は、ホスト社会と移民双方の歩み寄りの言語選択であり、後者はエスニックコミュニティ内の言語社会化ストラテジーとして解釈ができる。移民が80%を超える(OCC 2006)ティンプーで観察されるさまざまな言語選択と言語使用の実践は、異なる民族出身のブータン人がそれぞれの位相で試みる共生の試行錯誤を反映しているといえる。

【引用文献】Office of the Census Commissioner Royal Government of Bhutan (OCC). (2006). *Results of Population & Housing Census of Bhutan 2005*, Office of the Census Commissioner. <<http://www.bhutanecensus.gov.bt>> (2018年7月30日) 他。